
アルマダ！

富士堂あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルマダ！

【Nコード】

N3795Z

【作者名】

富士堂あかり

【あらすじ】

ごく一般的…のはずの女子高生、椎名優はある日謎の男に渡された装置アルマダによって半ば強制的に変身してしまう。理不尽な要求をつきつけてくる飯島に怒鳴られながら優は悪の組織と戦うことに…

00*雨

気がつけば夢中で走り出していた。いや、逃げ出していた。

雨が酷く降っていた。臭い立つ悪臭が流れて欲しいと思いながら全力で走る。向かう当てもなく。

呼吸が思うように出来ない。呼吸とは、なんだっただろうか。思い出せない、俺は、なんだ？誰なんだ！さっきまで、はっきり分かっていたはずだ、俺は…

景色は驚くくらい速く変わっていった。まるで他人事のように感じた。悪い夢だ、そうであってほしい。そうでなければ困る。

何が困る？困ることなど何もないではないか。しがらみから解放されたのだ。そうか、そうなのか？いや…

「嘘だ…」

通行人と目が合った

全身が総毛立つ。やめろ、違っ、違っ…

それは止める
！

次の瞬間、俺の世界は再び赤に染まっていた。

何故、こんなことになってしまったのか。何故、彼女が死ななければならなかったのか。

あいつの言った意味が漸く理解できた。これは危険だ。しかし自分ひとりではどうすることも出来ない。方法を探さなければ・・・そして終らせなくては。でなければ彼女の元にはいけない。

暗雲の中、獣は風の様に光の中を駆け抜けた。

01*あんパン並びにヒゲ、そして

学校の床っていうのは走ることを前提に設計されていない。

「はっ・・・うう・・・っ！」

廊下を走ってはいけません、なんて念仏のように唱えられてるけどそれは優雅じゃない、とかマナーの問題なんかじゃない。とにかく滑る、危険なのだ。

普段から廊下を走っておけばよかった、と自分の真面目さを呪った。いや、真面目ちゃんかと聞かれたら迷わずいいえ、と答えるのだけだ。残念ながら寝坊の類はしないただ、話がずれてしまった。さしあたっての問題。過去を気にしている時間はさらさらない。

「まったく…どうし、てっ！」

普通にグラウンドで走るのとは違う、上手く踏ん張れないし下手すりゃ転ぶ。けど今は安全に歩いていくことも転ぶことすら許されていない。

もし少しでもスピードを落としたら、もし転んだら……。心臓はばくばくしていて肺は裂けそうな位痛い。でも今は、とにかく走るしかないのだ。

耳にうるさい程の足の音、咆哮のようなそれを叫びながら化け物が

彼女の後ろにいた。

01：あんパン並びにヒゲ、そして

どうしてこんなことになったのか、話は少しばかり遡る。

「…っごるあああ待てええッ！」

「だから待てと言われて待つ馬鹿はいませーんっ！」

デジャブではなくて、（むしろ時間軸から考えたらあっちがデジャブだと思う）私は怪物に襲われる少し前、同じようにおっさんに追いつけられていた。

放課後、学校の前のパン屋さんで買ったあんパンを頬張りながら帰宅中、突然目の前に現れた怪しいコートのおっさんに話がある、だなんて言われ最近変質者の類が学校周辺をうろついているという先生の話覚えていた私は素早く反対方向の道へと走り出した…がどういふ訳だか変質者さんの琴線に触れてしまったらしく（間違っても

罵ったりなんかしてないし）おっさんと現在こうして追いかけてこしてる次第である。

けど陸部の私が全力で逃げてるって言うのに振り切れないってどう
いうことなの？

ちらりと罵声の聞こえる後ろを見れば鬼のような顔したおっさんが
未だ間合い十メートルを保ちながら迫って来る。

「だああっ！このクソアマあ！止まれっつってるだろうが！」

「と、止まったら何か…っ、はあっ！確実に、ヤバい気が…っ、するじゃないですか！！」

「お前が逃げなきゃこっちだって、っ、走らんわ！」

「いやだから貴方が追い掛けて、はっ、来るから！逃げて！るんです！」

「じゃあ今すぐ止まりやがれえええええ！」

「お断ります！」

ずっとこんな感じで追いかけてる次第で。歳を考えればあちらはおっさん、果てはこちらは学生。体力勝負ならこっちのものだと思つて校庭を三周ばかりしたその時、がり、と足元が揺れるのを感じて私はそのまま地面にダイブしたのだつた。

「あっあああああ!？」

ずしや、とアスファルトを数メートル滑る。

痛い、一瞬の間の後、やばい、そう思うのとほぼ同時に背中に思い切り衝撃が加わった。

「いたっ！ちょ、何するんですかつ！どいて下さい！」

とりあえず可能な限り手足をばたつかせてみるがお腹を固定されてこちらは腹ばい。背中にいるであろう重しはびくともしない。

「くそ…手間掛けさせやがって…たく、しかしいくら使える奴がいないからって女かよ…」

「はあ！？意味わかんないんですけど！いきなり、追っかけてきて…はあっ」

背中に変質者が乗ってる。想像したくもない、と目をつむって、開く。頭に浮かぶのは最悪のケース、変質者に捕まった女の子は1誘拐される、2襲われる、3人身売買、4解体して内臓を売る…のどれかあるいはフルコース！少なくとも1と2は必須な気がするけど、どうやらここで私の人生は終わってしまうようです。折角バイトしてお金溜めてたのにな、全部使っちゃえばよかった。

「…一週間後になってテレビでニュースになるんですね、行方不明の高校生、白骨化して見つかるって」

「…一応言っておくが俺はお前に用があつてこの町まで来たんだ。ついでに俺はお前に興味はさらさらないし間違つてもお前の考えるよーな下らないことをしにきたんじゃないやねえ」

じゃあなんだって言うんですか、出会い頭に本気で追い掛けてきて、地面を転がった女子高生に劳いの言葉の一つも掛けない鬼畜な人は勿論そんなこと言ったら何か酷いことになりそうだったので少し考えてじゃあまず私の体から離れて下さい、そう言おうとしたその時、ぐい、と力強く襟元を引つ張られた。

ちょうど、体を起こしてやるように。

「こいつを使える奴を探しに来た」

そう言つて、男は私の目の前に黒い螺旋を突き付けたのだ。

何か、具体的に形容するにはあまりにも抽象的な形だった。

男の手からぶら下がるそれは鈍く光を吸収していた。黒く、光沢を持ったそれは金属なのだろうか。筒状のそれは折り重なった金属やら透明なガラスを納めていて一見秩序のないちぐはぐなオブジェのよう。しかし、少女はその奇妙な内臓を納めている螺旋状の黒に目を奪われた。

黒の筋が二つ、DNA螺旋を思わせるそれに何故だか心ひかれた。

「…おい、いつまで黙ってる」

ぽこ、男の呆れたような声と頭に残る緩い衝撃。頭が妙に冷静になってどいて下さい、と言ったが男が背中から離れる様子はない。

目の前の螺旋が姿を消した。

「…あつ！」

「あまり時間がないんだ。ここで話するのは都合が悪い」

「あーもう分かりましたからどいて下さいよ、腰痛になったらどうするんですか…」

酷いです、としよぼくれたような声を上げれば男の呻くような声、

不本意なようで、のろのろと背中を離れた。
少女もゆっくりと立ち上がる。少しその場に静止して不意にくるりと男の方を見た。

「全く、女子高生捕まえて馬乗りですか、重罪ですよ重罪！」

「仕方ないだろ！緊急なんだよ！」

ところでここ最近学校の周りで無差別に生徒に話しかけてたのは？と勢いのまま尋ねれば男が目を丸くする。少しだけしまった、とでも言う様な顔をして広まってるのか、と齒切れ悪い台詞にホームルームで注意されましたよ、スカートの埃を払いながら言う男はそれきり黙った。

「でも私が聞いたのはマスクした男って、あ、あとなんで他の生徒でもなく私なんですか？それとそれ！黒いの、なんなんですか、私が見えるって「だあっ！だからここで話すのは色々とまずいんだ！」「・・・じゃあ話を聞いて差し上げますので何か奢って下さい、ね？」

「っ、わあつたよ、大人しくしてろよ・・・だからガキは嫌いなんだ・・・」

「はい！でもこんな歳が離れてたらカップルじゃなくて親子ですね、」

「おまつ」

ドオオオオオオッ！！

瞬間。男の表情が険しくなったのに気が付くことはなかった。男の怒号も彼女の耳に届くことはなかったのだ。

地響きにも似たそれ。激しい爆発音が辺りに響き渡る。

見えたのは自分と同じく呆然と目を見開く男の姿だった。

「が、学校だ…何、ばくはつ？え…実験室かな、すみません！ちよつと見てきます！」

「あ、おいつ待て！」

男が再びシャツを掴んだ。なんですか、と振り向けば酷く苦々しく表情を曇らせた男。

「…これを持ってけ」

「は？」

「持ってけ！」

「は、はい…？それじゃ、ちよつと行つてきます」

腕を掴まれ強引に先ほどのそれを握らされる。真意は分からなかったがとにかく今は学校に行かないといけな。少女は受け取った筒

を握り締めて校門の方へと走って行った。

そろそろと正門を通る。この時間は生徒は皆帰ってる時間だ。誰もいないグラウンドは西日で赤く染まっている。爆発音がしたのだ、もし誰もいなければ自分が警察か何かに連絡しなければならぬ。音のしたであるう方を見て、言葉を失った。

壁が壊れてる。

校庭の端、塀が一部分だけ途切れていた。白い塊が彼方に散らばっている。先ほどの衝撃音はこれのせいだ、大きく空いた穴は小さな車には余る大きさ。交通事故ならそうで質が悪い。誰も怪我してないからいいものを、轢き逃げと変わらないじゃないか、と携帯を構えながらふと、言いようのない違和感。

何か変だ、と漠然に思うものの何がおかしいのか、歩み寄り、瓦礫の山、しゃがみ込んだ刹那再びの爆音に思わず叫び上がった。

そしてその違和感の正体と原因を瞬時に理解した。

校舎の近く、コンクリートがえぐれている。そこには自分の何倍もありそうな大きな化け物が、こちらに視線を向けて立っていた。

瓦礫の山、タイヤの跡があるべき場所にあったのは無数の窪み。否、その窪みの持ち主が今私を見てる。

「うばあゝ ああゝ ああ！！」

「　　つつわあああああああ！！！！！」

頭が真っ白になった。なんだあれは、なんだあれは！？

化け物、と形容する以外にいい言葉は彼女の混乱した頭の中には存在しなかった。咆哮を響かせるその怪物は遠くで自身がここに入り込んだ所でうごめく小さな存在に気が付いたのだ。どしん、どしんと地を鳴らしながらそれはどんどん近づいてくる。

「うばああああっ！！いいゝ所にきた、なああゝっ！何もなくて退屈してたところゝだああっ・・・」

「・・・ひっ、いや・・・いやあああああっ！！！」

震える体を制止して校舎に向かって走り出す。背中を向けてはダメだと直感で思った。追いかけっこなら確実に負ける。校庭の周りは高い塀で囲まれてる。登って外に逃げ出すのも上手くいきそうになり。かといって横に走るのも危ない。そうして彼女は一見して最も危険だと思われる方向へと走り出していた。怪物は獲物が自分から殺されにきたのだろう、赤い幾つもの目をぎらつかせて笑い出した。近づくほど奴が異常なほどでかい図体をしているのがひしひしと感じられた。そしてどんどん加速していることも。

そしてその時を待っていた、怪物が最も冷静さを失っている時を、自分が最も集中してる時を。

「うおおおおあああゝっ！！！」

今だ！少女は踏み切り、体を回転させる。大きく一步を取った。そして獣の影が自分を覆った時に思い切り真横に体ごと飛び込んだのであった。

一瞬の出来事がコマ送りのように酷く長く感じた。上手く受身を取って素早く立ち上がる。ちらりと横目をやれば怪物は遠ざかっている。重いものを動かすのにはより大きな力が必要、止めるのにもそれ相応の力が必要。加速が止めばまた一からやり直しなのだ、

「ぬゝおおおっ！！小娘ええゝ舐めやがっでええええッ！！」

「っ！！！！早く逃げなきゃ・・・いや、これ、外に出してもやばいっ！！」

獣が再び運動を始めたのを背に感じながら考える。近くはすぐ民家だしあのデカブツがどこから来たのは分からないが町に放すのはあまりにも危険すぎる。

自分のこの危機的判断能力を疑いながらも気が付けば校舎に向かっていた。

足音が迫っている。ローファーマのまま校内に入り込む。

「までえええええ小娘ええええ　っ！！ぶちコロスウウ！！」

「っ！ああもうしょうがない！殺してみたりや捕まえてみるからねこのウスノロ！！女に追いつけないなんてだっさい牛さん！！」

言い切るより早くひときわでかい叫び声に耳がいかれそうになる。さあ、もう後には引けない。尊大なネズミは命がけだ。でも、きつと方法がある。そう思わずにはやってられなかった。

（・・・そうだ、屋上から落とそう！さっきみたくやれば・・・）

「おおあああああ　っ！！！！もう逃げられねえ　ぞおおっ！！」

「・・・っ！？うわああああっ！！」

いくら狭いからと言ってあなどっていた。怪物の言葉を聞くまで近

くまで来てることなんて気が付かなかった。恐怖に足がすくみ地面に投げ出される。

怪物とにらみ合いながら後ずさる。どすん、どすんと怪物が進む。

壁に触れながら、手が沈む。人一人入るくらいの狭い横道。確か建設の時間違って作っちゃったとか・たまに馬鹿な男子たちが入って遊んでいるのを見たことがある。

少しでも長く生き延びたかったからであろうか、怪物の終わりだ、という台詞を聞いた瞬間そこに入り込んでいた。三メートルくらいある。胸が悶えたがなんとか奥に入り込む。

「ぐへへっ、本当にネズミみでえだなあ・・・」

「・・・っ」

だが後は詰めてくれただけ。怪物は悪臭を放ちながら叫び、唾液を飛ばしながらその狭い穴を広げていく。がりがりコンクリートを崩していく音、すれすれまで迫っている獣の腕。

もう何処にも逃げられないではないか、どうして私なの。何も悪いことなんかしてないじゃないか。

さようなら、色々ごめんなさい、にじみかけた涙を堪えて崩れそうになる、刹那。

『ACTIVE TYPE ARMED』

機械の音がした。
時間が止まったような、それくらいその音は私の頭の中ではつきりと聞こえた。

走馬灯のようなものか、はたまたそれが文字通り私の頭に響いたものなのか、とにかく私は何が起きたか分からなかった。片足がおかしい。膝より少し上から何か機械のようなもので覆われている。これはまるで…

「おゝんなああゝっ！ぶっ殺してやるゝうっうっ！！」

「っ！」

選択肢など存在しなかった。

力の限り足を振り上げたのと時を同じくして物凄い衝撃に私は壁に打ち付けられた。

02*アルマダ、或いは不法侵入

今日一番の衝撃だ、と煙の沈み始めた頃に立ち上がって外へと顔を出した。

廊下は窪地から放射状に爪あとを刻んでいた。怪物が受け止めたからかあまり被害は大きくはなかったが。

ぐったりと地面に倒れこんだ様子を見るとさっきの衝撃で伸びてしまったらしい。死んだのかどうかは分からないしあまり近くに居たくはなかったので伸びているのを確認し颯爽とその場を立ち去った。学校にいた理由は分からないがあのだ分じゃ退屈しのぎだったと思える。

大きな牛の角に無数の赤い目、体軀は数メートル、異常に強い力を持っている。あまり頭はよくないようだがあんなものを野放しにしている筈がない。

そして自分の身に起きたことも、だ。化け物をノックアウトしたあの現象。何が起きたかよくは分からなかったが、とにかく私の身にも不可解なことが起こっている。

あまりにもいっぺんに不可解なことが起き過ぎてどうしたらいいか、そんな悩みは疲れと空気を読まずに鳴るお腹の音で一遍に吹っ飛んでいった。

02：アルマダ、或いは不法侵入

「ふーっ、っ、か、れ、たあー」

これじゃ明日は全身筋肉痛だな、と暖かい湯につかりながら思い切り体を伸ばす。食べた後すぐお風呂に入ると消化によくないって聞いたことがあるけど知ったものか、とにかく今日は疲れた。

薄緑色の湯に体を沈めていく。息が泡となつて波面を揺らす。溜息をつく、今だ頭はショートしたままだ。

「明日も学校だけどうなるんだろう・・・地方紙に載るくらいのも二ユースだよ、警察も来るのかな・・・ってかあれ、伸びたまま置いてきちゃったけど大丈夫かな・・・なんか不安になってきた・・・」

「・・・ってか冷静に考えればなんでさっさと逃げなかったんだろ・・・闘牛士じゃないんだから」

「けどなーんで私のほかに誰もいなかったんだろ・・・あーもう、なんかむかつく」

入浴剤の甘い香りが鼻をくすぐる。とにかく今日は早く寝よう。こんな変なことがあつて溜まるか。よくよく考えれば不可解なことが多すぎる。きつと夢に違いはない、それならばそろそろ覚めてもいい時間だ。そうでなければ別の夢にこんにちは、悪夢は記憶の彼方になる、はず

「残念ながら夢オチじゃねーからな」

がらりと窓が開いて夕方の男が再び登場した。

気が付けば男の頭はぐしゃぐしゃになっていた。自分の手には桶である。

誰がどうみても私が水をぶっかけた以外説明しないだろう。濡れ鼠になった男は怒っているのか、呆れているのか、微妙な表情。

「・・・お前なあ・・・！」

「いやいやいやおかしいでしょ！何処の世界に女子の入浴シーンに生真面目な顔して入ってくる馬鹿がいるんですか！のびた君か！」

「だからガキに興味はないつつつただる馬鹿が！追いかけてこの次は水か、あの後お前帰ってこなかっただろ、だから心配してやったつつーのに・・・」

なんで私の家の住所知って、と零せば大人の世界には色々ある、と謎の台詞で濁される。この人、やっぱり危ない感じの人っぽいな、と男を睨んだ。

いくら興味ない、って言われても見られるのは癪だ、そう思い立ち上がって窓に手を掛ければ冷たい風に身震いする。

「俺の気持ちがあったか」

「寒い・・・」

「こっちは倍さみーんだよ！とにかくあの後どうした学校は何もな

かったのか？」

「えっ、それは・・・あの・・・」

「？」

どうしたって、そう口にして涙が出てきた。怖がって泣く暇なんて無かったのだから。

男のうるたえる声が聞こえた気がしたが時間遅れの涙は止まらず、ぐずぐずになりながら怖かったです、となんとか言葉にした。

のぞきじゃない、と風呂場までやってきたそのどこからどう見ても怪しい男はどういう訳か、濡れた髪を黙って撫でていた。本当は優しい人なのかも知れない、まだ、よく分からないけど。

「・・・っ、すみません、風邪、引いちゃいますよね」

「・・・お前が無理そうなら、少しは待ってやるが」

「あの、話、するって、言っただじゃないですか・・・部屋、二階なんです上で待っててください。すぐ、あがりますから・・・」

「・・・ちょ、」

「窓の開いてる方です、とりあえず、少し聞かせてください・・・もう、訳が分からなくて」

「いや・・・すまん、ちょっと」

「？あ、タオル欲しいですか。い、今持ってきます・・・」

そうじゃなくて、壁を登っていけってことなのか、と渋い顔で言われてああ、と少女は声を漏らしたのだった。

さて、とタオルを被った男が言った。

「その様子じゃ実際に見たようだから説明できることは説明するが、よく帰ってこれたな」

「あれは・・・一体、なんなんですか」

あの時校庭で見た怪物。ありえない、と先ほどまで否定してた自分がいたはずなのに。

男は唸って、顎を擦った。

「一言で言うと難しいが・・・名前は分らん。正体も知れたもんじゃねえが・・・とにかくあれは、いや、あいつらは紛れも無い怪物で楽しみで人を殺しちゃうよーな奴らだ、まともなもんじゃねえ」

「・・・あいつらってことはあの牛以外にもいるってことですか」

「残念ながら敵は軍団だ。数日前この町に来てるつつータレコミを貰った「ちよつと待って！それ、他にも協力者がいるってことですか？」・・・まあ、協力者といえそうかな。あいつらを止めるために協力してくれてる仲間はある・・・がこうやって俺みたいに

実際に動いてる奴はいない」

確かに、あれと面と向かって戦おうなんて思う人はいないと思える。私だってもうあんなの近くにすら行きたくはないのだ。

「ところでお前に渡した奴。あれちゃんと持つてるか？」

「え、ああ・・・！そうだ、あの、私、あれに追っかけられてるときにいきなり、機械？みたいなのが・・・よく分からないんですけど足が変化して」

少女のたどたどしい説明に男は目を丸くした。驚き、そしてそれは感心したようなそれへと変化していった。

「そうか、いや見立て通りといえばそうだが・・・まさか使い方も教えずに発動させるとは・・・」

「ちょ、ちょっと！やっぱりあれ、これのせいなんですか？いきなりことで、よく」

「それは足だけ、か？」

言葉を遮られる。そうです、と一言返せばやってみる、と差し出したそれを付き返される。やってみる？どうしてああなったかも分かっていないような自分に何を言ってるのだろうか。この人は無理をいいすぎなんじゃないか、と恨めしげに見ていれば気が付いたのか、渋い顔をされて、気合を入れてみる、とまたまた無茶な質問。

「あー・・・お前、なんかスポーツやってんだろ、その時に、なんでもいいから集中するために毎回やってることとかないか。それがな

ければ目を閉じてそれに同調するように意識を集中しろ」

「無茶ばかり・・・いきますよ、あ、失敗しても何も言わないでくださいね。つかやり方知ってるならさっさと教えてくれたっていいのに」

黙って集中しろ、と男が言う。ゆっくりと目を閉じて掌のそれに集中する。冷たくて、不思議な感触だ。握り締めて、掌の感覚に集中する。暖かくなってる気がする。いや、確かに熱い。

熱くはなっているが、あのとさどうやって変身したかなんて覚えてない。何も変な感じはしていない。部屋の中は沈黙に包まれていてこちらを見ているであろう男の視線を想像してむずがゆく感じた。もういいですか、無理そう、と返事も聞かないで目を開けて、不敵に笑う男の顔と・・・そして体を覆う違和感に私の世界は再び時を止めた。

体中を何かが覆っている。視力は悪くないほうだがよりくつきりしている。マスクのようなものを被っていて中からではよく分からないが、恐る恐る掌を上げればあの時見たそれにそっくりの二本のグローブに覆われた腕が視界に入っていた。

「どうだ、初めて変身した気分は」

「え・・・これ、私、今どうなってるんですか、何これ！」

「落ち着け。あんまり暴れると床が抜けるぞ！しかし、くく、これが偶然じゃないってことはなかないじゃないか！！いいか、椎名、今お前の体はアルマダで強化されてる。俺たちが持つ最大の力を持ったそれにな！アルマダは単なるオブジェじゃない・・・対怪物用のボディスーツだ。そして・・・まあみてみりゃ分かるが、お

前はこいつを使える数少ない適応者」

「ちょ、つまり・・・私はこれで、怪物を倒したってことですか。これ、あの、私、変身ヒーローの類に変身してるってことですかあぁ！！？」

「そうだ、ま、あんなちゃちなもんじゃないが・・・とにかくお前さんにはこれから俺に協力してあの怪物たちと戦って貰う。被害が出る前に食い止めるのが俺達の仕事だ、いいか？」

アルマダ、と男が言った。この筒の名前だろうか。

掌から筒は消えていた。腰のベルトに筒だったものが電子光を放ちながらついている。

もし断ったら、その言葉に男は言う。お前が想像できる最悪のケースになる、と。

戸惑った、しかし、断れる気がしなかった。ゆっくりと頭を縦に振ればにやりと笑って男が掌を差し出す。

「俺の名前は飯島英二、お前のサポートをしてやる。お前も・・・応名乗つとかなきゃ気持ち悪いだろ？」

「・・・しいな、椎名優です」

「よし、それじゃあこれからよろしく頼むぞ」

「が、頑張ります・・・飯島さん、よろしくおねがいします」

「ちょっと待て、さっき怪物を倒したつつったよな」

飯島さんの視線が痛い。何かまずいことを言っただろうか。だから

キックしたら気絶しちゃいました、そういきった瞬間飯島さんのグーパンが私の頭ごとマスクを揺らしたのであった。

「ひ、酷いです飯島さん……いきなり、ぶつなんてっ！」

「うるせえ！！どうして止めを刺さなかったんだよっ！まさか学校においてきたのか！！今すぐ行くぞ！」

「え、もうパジャマなんですけど……」口答えすんじゃないええええええええええ！！」「ひいっ！わ、分かりましたあ……っ！」

残念ながら私のお話はこれからだったようです。女の子はスカートを履いた魔法少女になるものだと思っていたのですがどうやら私の場合は違うようで、少し怖いおじさんに言われるまま

残念ながら学校はぼろぼろのまま怪物の姿はなかった。私は正直よかったと思ってるけどまたグーパンを食らったのは不本意でしたけど。とにかく本当にこれが始まりのようです。私、今日からヒーローになりました。

何処の暗闇か、だだっ広く何にもない場所がそこにはあった。

いや、何も無い、というのは少々語弊がある。その、酷く暗い空間の中、それは居た。

「随分と見苦しい真似をして下さいましたね」

部屋の中、ひときわでかい図体のそれに向かって男が言った。毛む

くじやらの体からは立派な角が生えているが酷く汚れている。ところどころ血が滲んでいて彼の体臭と交わって酷い悪臭を放っていた。

「うづ うづう、いきなりのことで、ぐうづ」

「やはり貴方を自由にするのは間違いのようですね・・・現段階ではなるべく事は隠密に、と閣下のご命令です。次失敗したらどうなるか・・・クククッ」

男の笑い声にびくりと毛の塊が怯える。体躯の差は明らかなのに、獣は見るからに怯えていた。男の笑い声に釣られて他の笑い声が混じる。其の中で一人、腕を組んで一部始終を見てる別の男が居た。

「ギルスティン、ビークを責めるな。ビークも悪趣味なことばかりやってるからそうなるのだ、遊びでやってるんじゃない」

其の言葉に獣は再び身を縮こませる。先ほどまでそれを誇っていた男はごきりと首を回して大げさに手を広げてそうして暗がりに向かって歩みを進めた。

「おっと、私はその点に関しては貴方に賛同は出来ませんね。堅物のオウズウェル殿、少しなりとも楽しんではよいではありませんか・・・？」

「・・・やりたければ勝手にやれ、私は責任は取らんからな」

獣は男が暗闇の中で消えるまでじっと見ていた。瞳に怯えの念はなかった。かわりにそこには獲物を見たときに見せるぎらぎらとした赤黒い意志があった。

「ぜっだいに・・・次はぶっ殺しでやるうゝ・・・!!」

次は期待している、そういうも既に外の音など聞こえていないようだ。ずんずんと小うるさい音を立てながらビークもまた暗がりへと消えた。

考える、奴を好き勝手させたのは確かに失敗であつた・・・が、ビークを一撃で倒した者とは一体何者なのであるうか。今まで自分達にまともに反抗できたものなど皆無と言っていい。恐らく不意をつかれたのであろうがしかし、放って置いていい案件ではなさそうである。計画の邪魔になる可能性はなるべく早く消したほうがいい。早急に手を打たねば、と男は重い闇の中へと姿を消した。

03*監視者と覚醒(前編)

「ん・・・んー、う?・・・うーん・・・」

目覚めはあまりいいものではなかった。体中妙に痛い。そういえば、と優は昨日のことを思い出してああ、と一人納得したように息を漏らす。恐る恐る枕元を見れば今までなかったそれが優の目に入った。アルマダ、と飯島さんは言ってた。このなんだかよく分からないもののせいで昨日は散々な目にあつたのだ、いや、もしあの時これがなかったら今頃どうなっていたかは分からないが・・・。とにかく優にとつて重要なことが昨日のこと、変質者だと噂されてた男からこれを受け取り、学校で怪物に襲われ、そして命がけで退治したこと、それらが全て夢じゃなかったということだけだ。

あの怒涛の出来事から昨日の今日、今日くらいはゆっくり朝寝坊したい気分であつたがタイミングよく一階から母親の呼ぶ声が聞こえてしまったのでしぶしぶ布団から這い出て、ふと、枕もとのそれを手に取り姿見の前に立つ。目の前にはぐちゃぐちゃの髪でだるそうにしてる自分がいる。優は緩慢な動きで手を伸ばし、言った。

「へ、へんしーん・・・」

彼女のけだるげな言葉に対しそれは昨日と同じくぎちぎちと奇妙な音を立て鏡に映った自分の姿を変えた。変身ヒーローとはよくいったものだが、言うなればこれは仮面ライダーって奴に似てる。話はそんなに知らないけど、なんとかレンジャーみたいなよりはそっち寄りだ。

でも普通、女だったらひらひらのスカートと魔法の杖なんじゃないだろうか。いや、あんな恥ずかしい格好出来る木はしないけど・・・

だからといって男の子の憧れるようなヒーローがいいわけじゃない。科学的な21世紀、実用性で見ればこっちのがいいのかもしれないけど。

「どうみても中に入ってるのが女だとは見えないよね・・・」

自分の身長を呪った。確かにでかいほうだけど、そんな時なかなか降りてこない母親が痺れを切らしたのか先ほどよりも大きな声でご飯、と催促する言葉が耳に入って優は慌てて部屋を飛び出したのであった。

03：監視者と覚醒（前編）

あまり期待はしてなかったのだが学校はやはり昨晚のままだった。夜遅くに飯島と学校に忍び込んだ優には閉められた校門も、沢山のパトカーも、いたるところに張られた危険立ち入り禁止、と書かれた黄色いテープもそこまで驚くほどのものではなかった。

とはいえ校門の前でたむろする野次馬はなかなか凄い、他の生徒よりしく優もその集団の中に頭を埋めて人を掻き分け校門のところまで踊り出る。先生の帰りなさい、という言葉や生徒の面白いがる声、その中に例の変質者のせいだ、という言葉が聞こえた気がした。飯島さんがやったのだったらまだマシだっただろう、いや、たちの悪いのに変わりはないけどさ。

ひとまずこれで今日は休校だ、そう思って集団から抜け出したとき、ぺしりと何かに頭を叩かれてああ、と優はその男を見上げて言った。

「おはよ、先輩」

「随分呑気だな、お前学校見たのか？」

呆れたように男がそう言う。周りの人たちと同じように制服を来たその青年、名前を皆川敬といい優と同じ日野高に通う高三だ。家が隣、そうなればそれなりのお付き合いをする訳で家ぐるみのお付き合い、所謂幼馴染という奴なのだがこれが勉強スポーツなんでも出来ておまけに結構な男前なのである。長く付き合ってるのだ、別に異性として好き、とかそんなのではないけど、まあ自慢のお隣さんだ。

「だってあんな人いたらよく見えないし・・・先輩は知ってるの？
中のこと」

「え、いや・・・俺も詳しくは知らないけどなんでも凄いらしいぞ、
トラックが突っ込んだみたいなの、あと校舎の中も酷いって」

ふうん、となるべく自然に相槌を打つ。実情を知ってるだけに辛いトラックじゃなくて大きな牛の怪物なのだと漏らしてしまいたい気分だったけどそんな夢みたいなの話、何も知らないということにしとけというのが飯島さんの命令だ。取調べとか受けたくないし。話を逸らすためにもう帰る？と振ってみると敬は少し妙な顔をして、

「お前、今日は珍しく大人しいのな」

「何が？」

「いつもはこういうの喜んで頭突っ込むだろ」

「え、だって・・・その、トラックがつつこんだんでしょ、それなら

別に」

ああ、その視線が痛い。このまま下手に言い訳するのはあまり得策じゃない、とだつて学校休みだし、そう言つて敬の前に行くように歩き出せば全く、と呆れるような声。とりあえず撒いた、と妙な確信をしてそのまましぶしぶと言つた様子で付いてくる敬の数歩先を行きながら帰路に着く。

「なあ優、」

「何？どつか寄つてく？」

「あのさ・・あんま変なところろろするなよ。お前いつつも何かやらかすだろ、最近物騒だし、人のいないとことか夜一人で出歩いたりするなよ」

「なんで敬ちゃんがそんなこと言うのよ、先生じゃあるまいし」

それは、言いかけてそれきり敬は黙つた。そんなに危なつかしいのだろうか、心配してくれるのは嫌なわけではない、けど一番守れそうにないことだ。その物騒なものと戦わなくちゃいけない。ありがたい、と照れくさくなりながらもそう返せば困つたように笑う敬がいて心の中でそつとごめんね、と謝つた。

「この町には高い建物が全然ありませんね・・・」

小さく蠢く人間たちを見下ろして奇妙ないでたちの男がそう言う。眼下では小さな虫けら共が必死に我々の跡を探している。あいにくと物を直す力を持った者はいないのだが別段知られて困るレベルのものではない。言葉を向けられたであろう男は崩れたコンクリートの山を睨み付けていた。

「・・・オウズウェル様？いかなされましたか」

オウズウェルと呼ばれた男はいや、と踵を返す。突風が吹きばさりとボルドーのマントが風に煽られ男の姿を太陽の下に晒す。暗褐色の体は硬質の殻に覆われ鋭い爪は簡単に人間の肉などとも簡単に裂けてしまいそうだった。肉の甲冑を着込んだそれは重たげな見た目に反し酷く静かだった。一緒にいた男は畏まって地べたに膝をついた。

「エイダオース、お前ならばこの町をどう攻略する？」

「は・・・、そ、それは私めに任務を、という意味でございましょうか・・・」

「たとえばの話だ。しかし・・・うむ、一度お前に一任するのもよいだろう。しかし事は隠密に、との閣下のご命令だ。ピークのような愚かな真似は許されないぞ・・・ネズミがいるかもしれん、十分気をつけるのだ」

しかしネズミ、とエイダオースは返した。我々に逆らう分子など存在しようがない。ピークの噂はエイダオースの耳にも入っていたがピークは見た目どりの奴だ、油断や慢心が引き起こしたに違いない。下手したらこけて頭を打っただけで言い訳としてその幻を作り出したのかもしれない。とにかくピークのことだ、そう深く考える

必要はない。樂觀視しているエイダオースに反し、オウズウェルは渋い顔をするばかりだ。

「エイダオース・お前なら肉を集めるのもたやすいだろう。そして万が一にもそのネズミの足取りが掴めたら殺してしまつて構わん。好きなようにやれ」

好きなように、その言葉にエイダオースの体が僅かに揺れた。

「たとえどれほど微弱な可能性であろうと閣下の邪魔となる存在は許しておけん。さあゆくのだエイダオース」

仰せのままに、下卑た笑いを浮かべてエイダオースは町のほうへと向かう。

「・・・私の気のせいだといいが・・・」

残された男はそついい残して闇に消えたのだった。

「で、なーんでまた飯島さんがいるんですか」

立派な不法侵入罪ですよ、来るなら来るで電話でもメールでも寄越してくださいよ、と彼女は部屋の入り口に立つてうんざりしたようにそつ言い放った。窓を開けっぱなしにしとくお前が悪い、と悪びれもせず言つ飯島に返す言葉も思い浮かばないので鞆を投げてベツトに腰を下ろした。

「てか何でこんな時間に・・・あ、狙いは下着ですか、やだ飯島さんのエッチ」

「違い！だから・・・いや、もういい。あの分じゃ授業なんてやってられねえだろ。いや、帰ってこなくても待つてる予定だったけど・・・」
・「あの、いちおう私、年頃の女の子なんですけど」とにかくこっちもののろしてられねえ。見回りすんぞ、嗅ぎ回ってる奴が見つかるかもしれねえ」

この人は人の話を遮るのが好きらしい、優は暫く飯島をじっと見て、はああ、と大きく溜息を吐いた。

「普通こういう日って自宅でおとなしく勉強する日だと思うんですけど」

「まともに家にいる奴なんているわけないだろ準備できたら行くぞ」
拒否権なしな訳ね、ひとでなし、と呟けば聞こえてたらしくぱこんと頭上に鉄拳が飛んだのだった。

制服のままうつろうするのはまずい、とのことで私服に着替えて町を歩き回っている二人だったが昨日の今日のこと。別段変わった様子も怪しいところもない。

「ね、飯島さん」

「なんだ」

「本当にあてもないんですね」

「あてがあれば苦労はしないぞ。最近の若い奴はそうやってすぐ結果に走る。お前忍耐力ないだろ」

失礼な、と優が拗ねたように睨み返す。繁華街をこうしてうろついてる訳だが怪しいところとかいつもと違うところなんて全然ない。

「・・・あの、飯島さん」

「もしこの先またあんなのと戦うことになったらテレビみたいに敵の前で変身しちゃっていい訳ないだろ」・・・ですよね」

「一応責任者だから言っておくが敵に正体がばれて困るのはお前だけじゃないんだよ、俺が敵だったらお前を消すためにはどうすればいいか分かるか。お前は家族や友達を人質に取られてもいいのか」

現実とフィクションを混同するな、ペしりと頭を叩かれて飯島が先をゆく。商店街を抜けてすぐ、大きな公園がある。そういえば小さい頃はよくここで友達と追いかっこやら砂遊びやら一日中遊んでいた気がする。中学に入った頃には自然と足が遠のいてしまったが。なんとなく、足がそちらに向く。飯島さんもそちらに行く気があったらしく何も言わない。

「子供だからかと思ってましたけど、結構大きいですね、ここ」

「ん？ああ・・・確かにでかいな」

思い出はおぼろげで、こんなのがあったわけ、と優が見て回る。時間のせいかな小さな子供をつれた母親が沢山居た。いたって平和、優は正直このあてもない探索に飽き飽きしてたので思い出を確かめるように一つ一つ見て回った。飯島は自分達が場に不釣り合いなことを感じて居心地が悪そうに見えた。

「おい、他のところ見るぞ」

「まあここらは人もいっぱいいますしもう少し奥見ましょうよ、向こうに木とかいっぱいありますよ」

「ああ・・・っとすまん、ちょっとトイレいつてくる」

えー、とわざとらしく言う優ににらみを利かせて黙らせる。私は遠慮します、先に行つてますからさっさと済ましてきてくださいね、そう言つて公衆トイレから離れた。

遊具のある広場から少し先、小高い山のようになつたそこは雑木林が幅を利かせていて木漏れ日がきらきらと光っている。暗くなると結構怖いんだよね、とまだ青みを残したはっぱのヴェールを眺めながらゆつくりと歩く。

ふと足元を見れば、どこもかしこも植物の芽で覆われてる。長いところここに立ち寄ることはなかったが、こんなに葉っぱだらけだっただろう？見なれない種類の葉だった。でたばかりの芽からは妙に長い弦が地面に向かって伸びていた。

「おねーちゃん、何してるの？」

その時、自分を見上げる少年の存在に気づく。腕白そうなその少年はこの時間には見慣れない存在に興味を引かれたのか、ぐるぐると優の周りを回った。探検ごっこだよ、と人差し指を立てて目線を合わせてやれば目を輝かせて僕も、とねだった。

「何、さがしてるの？」

「んふふー何かな、何が欲しい？」

「んん・・・なんだろ、わかんないや」

私も知らないの、と優はあっけらかんとして言う。今日はこのまま見回りはやめてもう少し少年につきあってあげるか、そう思いながら歩いていく優は、視線が下に下がっていた為か、地面を覆う芽が夥しい量になっているのに気が付いた。芽は数を増し、大きく、太くなっている。その時、植物が恐ろしいスピードで生長してゆき

「だめーっ！ー！！」

とっさの行動だった。少年を突き飛ばしたのはよかったが、急激に大きくなつた弦が腕に絡みついた。突然の衝撃に呆然とした様子の子供だったが目の前の異様な光景にわっと泣き出した。植物は尚も異常なスピードで伸びてゆき気が付けばいたるところに絡み付いて動けない。植物がコンクリートを割って芽を出したなんて話を聞いたことがあるがそんなものではなかった。泣き叫ぶ少年に逃げて、と力の限り叫べばぐちゃぐちゃの目でこちらを見て走り出した。よかった、そう安堵するもさしあたっての問題、飯島さんはこんな時何してるんだ、となんとか腕を動かして携帯に手をかける。

電話帳を開き、発信を押した刹那、今まで絡みつくばかりだった蔦が思い切り手を叩いた。

「ああっ!!」

弧を描き、そして植物だらけの地面を滑る携帯。

「困るんだよねそういうことされると」

「!」

背筋に悪寒が走った。声が、自分の真後ろから聞こえる。やはり何か居る、無意識に身を硬くしていた。

「残念だがこれでお譲ちゃんが助かる方法はなくなつた・・・警察か？だが到着する頃にはもうここには誰も、いない!」

声が強くなる、それと同じく体に絡みつく力も大きくなり息が苦しい。頭の中は恐怖で一杯だった。このままでは変身する前にやられてしまう。一度これから逃れなければ、しかしどうしようもないではないか！背後に居るであろう男は姿を見せることもなく続ける。

「非常に困るんだ、オウズウェル様がわざわざ私に任せてくださった任務、邪魔されたら非常に困る・・・」

「あああつ・・・つくう・・・!」

「ふふ・・・痛いかな？苦しいかな？ガキと違つてお前はモルモットにはならないが、折角若くて可愛い女が手に入つたんだ、少しくらい楽しんだって任務に支障はないだろう?」

がばりと植物の蔦をまとめたような、そんな腕が背後から現れ優の体に触れた。しるしと蛇のように蠢く蔦が太もをなで上げる。悪寒がした。正気の沙汰と思えるわけがなかった。

「や・・やめて・・!」

「そうだ、もつと泣き叫べ・・・!いくら声を上げたって誰も助けにはこないのだから!アーッハッハッハ・・!」

せめて一瞬でも蔦の力が緩まれば、もはやここで終わりなのだろうか、諦めかけたその時、木の陰から何かが飛んできて。

「っ!?!な・・うわあああっ!!!」

どん、と何か鈍い音がして蔦が緩む。振り返って優はそれが飯島自身だったことを理解した。捨て身の攻撃だ、私は逃げられるが危険が増す。吹っ飛ばされた怪物はこの間ほど大きくはなかったがこれらの植物全部が体だと思える。

「てめー何女子供狙ってんだ?」

飯島さん!優は呆然とする。お前は早く逃げろ、と地面に倒れた飯島の言葉にはつとしてすぐに走り出した。

変身して戦わなければ、飯島さんが、子供たちが危ないと・・・

飯島たちが見えなくなるまで走った、誰も居ないことを確認してアルマダに手をかける。気合入れる、そう強く念じて思い切りそれを突き上げた。

「変身っ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3795z/>

アルマダ！

2011年12月17日19時50分発行